

あつろの杜

NHKサービスセンター札幌支局長
那須敦志さん

Interview

1970～80年代、旭川市の「河原館」を拠点に観客を魅了したアマチュア劇団「河」。高校時代に「河」と出会い、その軌跡を著した那須敦志さんのお話です。

旭川の歴史との出会い

本格的に歴史に興味を持ったのは、NHK旭川放送局長の時です。二回目の旭川勤務だったので、再びお付き合いの始まった人がいた。その人は郷土史をやっている、僕に旭川の古い写真を見せてくれたり、興味を惹くようなことを教えてくれたりしたんです。

僕はテレビ屋なので、「じゃあ映像にはどんなものがあるのかなあ」と思い、NHKのアーカイブスを調べてみたら、大正昭和初期や昭和三十年代・四十年代の映像がかなりあった。とりあえず一部を観てみると面白かったので、その友達にも観てもらったら、「那須さん、これはすごい。こんな映像あるなんて誰も知らないよ」と。彼が映像を手がかりに解析すると、今の旭川と古い当時の旭川が結び付くんですよ。それを一般の方々にも観てもらえば、自分たちの住んでいる旭川という場所を再確認するいい機会になるなと思います。

ふるさと旭川の今と昔を結びたい...



那須敦志
なす あつし

1957年旭川市生まれの生粋の旭川っ子。明治大学文学部演劇学科に入学、学生劇団「活劇工房」で舞台創りに携わる。1982年NHKに入局。札幌放送局放送部勤務の後、記者、ニュースディレクターとして道内各放送局や東京のニュースセンターで勤務。2010年に旭川放送局長となり、4年間の在任中、地域の古い映像を紹介する試みを自ら企画し開催。その成果を2013年に『知らなかった、こんな旭川』（中西出版）にまとめる。2014年7月から、NHKサービスセンター札幌支局長。2016年12月に『あの日たちへ』を発売。A5判258頁、本体1,500円＋税。

その映像をお観せするセミナーを始めました。二回目の旭川勤務は四年間でしたが、数十回も開催するほどの人気でした。

旭川在任中にやったほかの大きなものは「なつかしの平和通展」という企画展と、僕がいた時がちょうど常磐公園の造成が始まって百年だったので、それにちなんで行った「愛されて百年 常磐公園

の歩み展」。それと、たまたまNHK旭川放送局のブログに書き溜めていたものがあったので、一緒に働いていた人たちに、それを開局八十周年の記念誌にと勧められ、二〇一三年に「知らなかった、こんな旭川」を出版しました。

劇団「河」と「河原館」

「河」は一九五九年にできた劇団で、活動は八六年までの短い間でしたが、ものすごく光り輝いた特別な存在でした。

当初は俳優座とか文学座などのいわゆるリアリズム演劇（新劇）の影響が強かったのですが、二代目の主宰者、星野由美子さんが演出

するようになったあたりから、新劇に対するアンチテーゼとしてアングラが登場してきた。「河」の人たちもその影響を受けていくんですね。

劇団「河」の拠点が常磐公園の正門近くにあった「河原館」です。民家の土蔵を借りて劇団の稽古や公演、イベントなどに使っていた小さなスペースで、建物は今も残っています。

「河原館」は昼間、喫茶店になっており、高校三年生の時、たまたま近かったので足繁く通うようになったのですが、劇団員のお姉さんがそこでコーヒーを出していた。そのお姉さんに「今度黒テントとこの常磐公園に来るんだけど、興味ある？」と聞かれたので、チケットを買って観に行きました。

黒テントの芝居は衝撃的でした。「ものすごく面白かった」とお姉さんに言うと、「今度うちの劇団でも芝居をやるから来て」と誘われ、「河原館」で観たのが「河」の人たちがやった唐十郎の芝居で、黒テントよりもさらに衝撃を受けました。大学の演劇学科に進学し、学生劇団で舞台創りに携わったのは、それに触発されたからでした。

あの日たちへ

芝居の世界にずつつと関わりた

かったのですが、NHKに入り、放送記者やディレクターの仕事をするようになったので、その思いを封印していました。しかし、「知らなかった、こんな旭川」を出版する時に、「河」がずつつと自分の原体験としてあったものだから、その本にも一ページ「河」のことを書いたんです。その時、星野さんが旭川に住んでいることが分かり、お会いしに行きました。

星野さんは台本等の資料をすでに手放されていましたが、それが巡り巡って図書館にありました。見るとかなり充実した資料だったので、「河」を日本の現代劇史上特別な業績があった劇団として、きちっと位置づける本にすれば、世に出す意義があるのではないかと思います。『あの日たちへ』旭川・劇団「河」と「河原館」の20年』を書いたんです。

今年七月、三十年ぶりに「河」の公演を旭川で行います。当時やっていたオリジナルの「詩と劇に架橋する十三章」という芝居で、もう一度、それをやってみようということになりました。現代詩をセリフとして使う大胆なものです。

稽古を観に行っただんですが、大学生から八九歳の星野さんまで一緒にやっていて、なかなか感動的な光景でした。公演が楽しみです。